

# LEADERS NOW!

## 好奇心を原動力に、「冒険」の扉を開く

大自然をフィールドに、芽生える特殊な絆



1958年、日本の大学で2番目に創部し、「活動範囲は地球全体！」をスローガンにジャンル問わずさまざまなアウトドア活動を行う「探検部」。目新しい企画力、発想力で未知の地へ赴き、誰もしたことがないような体験を重ねる中で自身の無限の可能性も導き出していき、その活動の実態に迫る。



鉱物採取で集めた石を並べて。(左から)村上さん、田中さん、岸さん、外川さん、竹島さん

### ●文化会探検部

法学部3年次生 主将

竹島 翼さん (滋賀県 東大津高等学校卒業)

社会学部4年次生

岸 和沙さん (大阪府 大阪国際大和田高等学校卒業)

社会学部3年次生

村上 真渚さん (兵庫県 西脇高等学校卒業)

文学部2年次生

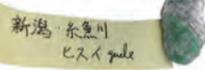
田中 悠介さん (京都府 東山高等学校卒業)

社会安全学部2年次生

外川 丈太郎さん (兵庫県 太子高等学校卒業)



▼糸魚川で発見した珍しい翡翠



### ●無限の好奇心に基づく個々の活動を尊重

探検部と聞いて、具体的な活動内容を思い浮かべることができる人は多くないだろう。それだけ「探検」という言葉には、ワクワクするような魅力が詰まっている。「一般的なアウトドア活動サークルとは少し違いますね。地理的な「探検」だけではなく、新しい形の「探検」を模索しながら活動しています」と話してくれたのは、主将の竹島さん。

メインの活動だけでも、南アルプスや大峰山の登山、四万十川や仁淀川での川下り、最近頻繁に行っているという鉱物採集、網走や知床での海岸線踏査、無人島での合宿まで、活動の範囲は驚くほど多岐にわたる。

「他部だと1年間の活動内容は決まっていることが多いですが、それがないのが探検部の最大のメリット。やりたいことをやりたい時に、何でもできるのが魅力です」(竹島さん)

基本的には「やりたいこと」を企画した部員を中心に、賛同メンバーを募って活動を行うのが探検部のスタイル。賛同メンバーがいなければ単独で活動する場合もあり、竹島さんは網走湖横断、田中さんは雪氷藻類の研究に一人で行ったこともあったそうだ。

### ●鍛えるのは体力、そして精神力。自分の成長を日々感じる

自由に楽しい活動ばかりしているように一見思えるが、もちろん装備の準備など安全管理・対策は万全に整えており、目標とする活動に向けた体力づくりのトレーニングも欠かさない。毎週部会後のランニングや、重い荷物を背負って学内の階段をひたすら往復する「歩荷」は探検部伝統のトレーニング。



▲比良山地の堂満岳(滋賀県)



▲探検部所有の山小屋「銀嶺荘」(京都府北山)



▼瀬戸内海の無人島・加島(広島県)



▼富士山9合目



▲奄美群島の江仁屋離島(鹿児島県)



探検部の倉庫

「重い荷物を背負うのは、どんな活動にも必要な力。例えば、活動中に負傷した仲間を背負って運ばなければいけない事態になった時、置き去りにするわけにはいきません。楽しさばかりでなく、有事が起こった時のために必要な体力づくりは怠らないようにしています」(竹島さん)

トレーニングや活動を通して体力が付いたのはもちろん、「自分には六甲縦走をやり遂げた経験があるから」、「17時間登山した大変さを思えば、このくらいは平気」と、探検部での経験が日常生活の困難や苦勞を乗り越えられる精神力の強さにつながっているという。

さらに主将の竹島さんは「常に通常とは違う角度から捉えた新鮮な活動を考えるようにしているので、企画力も身に付いたと思います。目新しい発想力や、いろいろな視点で物事をとらえられるようになりました」と自身の成長も感じている。

### ●自然をフィールドにするからこそ護るべきもの

山や海、川など大自然を舞台にした活動が多い探検部。切り離すことのできない環境の保全や自然との共生については、活動をする中で考えることも多々あるようだ。

「無人島はペットボトルや壊れた釣り具といった漂着物がとても多いんです。合宿で活用できるものはしますが、本来あってはならないものですね」(外川さん)。「道路が走る低山も不法投棄が多いですね。小さいものなら回収していますが、テレビや家具のようなものまで捨てられています」(田中さん)。「普段の文化的・衛生的な生活で当たり前になっていたことが、自然の中ではできなくなります。環境への影響を考え、自然に優しい洗剤を使うなど工夫しています」(岸さん)。「合宿ではマイ箸、マイ皿持参でゴミを出さないようにするのはもちろん、SDGsに準拠した循環型水洗のパ

イオマストイレなども利用します」(村上さん)。「排泄物と違ってトイレトペーパーは分解されづらいので燃やして捨てるなど、自然の中での礼儀や作法は必ず守るようにしていますね」(竹島さん) 人間が足を踏み入れるだけで自然の形は多少なりとも変わってしまう。その自然の中で学ばせてもらっているからこそ、探検部は環境への負荷を意識しながら日々活動を行っている。

### ●非日常の中で幾多の困難を乗り越えてきた 強固なつながり

最後に今後の活動目標を尋ねると「北極に行きたい」(竹島さん)。「スリランカ密林遺跡調査隊に参加したい」(外川さん)。「アラスカルートで北極に行って生態調査がしたい」(田中さん)と、目を輝かせる現役部員たちの隣で、既に活動を引退した岸さんは「自然と人間の日常生活が断絶されていると感じるので、探検部での経験を生かして、自然を感じられる生活の営みを今後もしたいですね。探検部では友達とも少し違う、特別な人間関係も築くことができました」と自身の活動を振り返ってくれた。

徐々に余裕がなくなっていく過酷な自然環境の中、部員同士でいざこざが起こることもあった。しかし、それを乗り越えた分、強い信頼関係が芽生え、同じ達成感を味わうという貴重な体験を重ねてきたという。「他のことでは得難い「仲間」としての関係は、探検部でないと作れなかったと思います」の言葉に、探検部の魅力すべてが詰まっている。

